

互いに認め合える学級づくりを目指した指導

－ 生活目標と関連付けた「宮野森P F A (Project For All) 活動」の実践を通して －

東松島市立宮野森小学校 大橋 康弘

概 要

開校3年目を迎える本校では、児童に他者の立場や気持ちに気付いたり、他者を思いやりったりする態度を身に付けさせることが重要課題である。本研究は、生活目標と関連付けた「宮野森P F A活動」において、児童による振り返りを意図的・計画的に実践することを通して、他者の理解を深め、互いに認め合える学級をつくることを目指すものである。

1 主題設定の理由

高度情報化社会、過疎化、核家族化による人間関係の希薄化など、現代社会では、児童生徒を取り巻く社会情勢は複雑化し、多種多様な問題が起こっている。そうした中、第2期宮城県教育振興基本計画や東部管内学校教育の重点を受け、東松島市では教育基本方針重点目標として「次世代を担う人材を育成するまちづくり」を掲げ、小中連携による「志教育」の推進や、「心あったかイートころ運動」の継続的な実践などにより、「豊かな心を育む教育の推進」を展開している。

本校は、平成28年度に、宮戸小学校と野蒜小学校が統合し新設された学校である。開校以来、目指す学校像として「個々の良さが輝いている学校」を掲げ、志教育と関連させた挨拶運動や異学年交流などを通し、それぞれの学級において、児童相互の望ましい人間関係の構築に努めてきた。一方で、昨年度実施した、学校や学級の生活に係る意識調査（Q-U）の結果では、他者から承認されていると感じる割合が低い児童が4割弱いることが明らかになった。こうした状況を踏まえ、今年度は、互いに認め合える学級づくりを本校の重要課題として位置付けている。

この学校課題解決に向けて、児童の実態を明らかにするため、全校児童及び学級担任を対象に、学級生活アンケートを実施した。学級生活アンケートの結果から、各学級の担任全員が、児童は日常的に褒め合っていると評価していることが分かった。一方で、児童自身が友達から褒めてもらっていると感じている割合は78%であった。Q-Uアンケートと学級生活アンケートの結果から、児童の承認に関する思いと教師の評価には、かい離が認められる。以上のような実態を受け、児童が他者からの承認を得られていないと感じている理由を探るために、職員研修を実施した。話し合いを通して「活動後の振り返りで、自他の良さや変容、考え方や感じ方の違いに気付いたり認めたりする視点を明確に示すことができず、認め合いの場を有効に機能させることができていなかったのではないか」という考えに至った。

昨年度、児童同士の関わり合いを深め「みんなが楽しいと感じる学校」を目指して、6年生児童が中心となり、挨拶運動や異学年遊びのP F A (Project For All) 活動に取り組んだ。このP F A活動は、挨拶運動や異学年遊びといった、他者と関わり合う活動と、自他の姿を振り返る活動で構成した。このような、児童同士が関わり合い自他の姿を振り返る活動を通して、6年生児童には、一人一人の考え方や感じ方の違いを受容し、互いに認め合って活動に取り組むようになる、という変容が見られた。学校運営協議会による学校評価や校内での年度末反省において、P F A活動を実践することを通して、他の学級においてもこのような変容が期待できるのではないか、という意見が多く出された。地域を含めた教育環境が整った今、改めて、児童一人一人が他者と関わり合う場を設定し、自他の姿の振り返りにより児童の内的変化を促すことを通して、互いに認め合える学級をつくることは、統合3年目を迎えた本校が取り組むべき学校課題であると捉える。

以上のことを踏まえ、本研究では、児童が他者と関わり合い自他の姿を振り返る活動として「宮野森PFA活動」を実践する。この活動を通して、児童が自他の良さや変容、考え方や感じ方の違いに気づき、大切な存在として認めることができるようにすることは、学校課題解決に向けて有効であると考えた。

生活目標の具現化に向けた取組である宮野森PFA活動を日常的に実践することにより、互いに認め合える学級をつくることができると考え、本主題を設定した。

2 研究目標

生活目標と関連付けた「宮野森PFA（Project For All）活動」の実践を通して、互いに認め合える学級づくりを目指した指導の在り方を明らかにする。

3 研究仮説

宮野森PFA活動において、以下の手立てを講じれば、互いに認め合える学級をつくることができるであろう。

- (1) 志教育の3つの視点を踏まえた生活目標の設定
- (2) 生活目標に係る日常的な実践（意図的・計画的な振り返りの場の設定）

4 研究の対象と方法

4. 1 研究対象

東松島市立宮野森小学校 第3学年1組 18名

4. 2 研究方法

- (1) 「人間関係づくり」「学級づくり」「自己有用感」などに関する文献調査及び先行研究による理論研究
- (2) 「平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（宮城県分）」に関する分析
- (3) 「Q-Uアンケート」と「学級生活アンケート」による実態の分析
- (4) 志教育の3つの視点を踏まえた生活目標の設定と振り返り
- (5) 志教育の3つの視点を踏まえた継続的な振り返りと伝え合いの実践
- (6) 朝の会、帰りの会等での実践活動における、振り返りカードを活用した振り返りと伝え合いの有効性の検証
- (7) 実践の分析及び「Q-Uアンケート」と「学級生活アンケート」による児童の変容の分析
- (8) 研究のまとめと考察、新たな課題の明確化

5 研究の概要

5. 1 研究主題及び副題について

5. 1. 1 「互いに認め合える学級づくり」について

小学校学習指導要領解説総則編（平成29年7月）には、学級づくりについて「学級を一人一人の児童にとって存在感を実感できる場としてつくりあげること」「児童相互の好ましい人間関係を育てていく上で、学級の風土を支持的な風土につくり変えていくことが大切である」と示している。学級づくりにおいて、一人一人が支持的に理解し合い、存在感を感じたり存在を必要としたりする関係を築くことは、生徒指導が目指す「自己実現を図っていくための自己指導能力の育成」に向けても、重要であると考ええる。

そこで、本研究では、「互いに認め合える」を「自他の良さや変容、違いに気づき、大切な存在と

して思いを伝え合うこと」と捉え、中でも、「違い」を「児童一人一人の考え方や感じ方の差違」と捉える。

また、「学級を一人一人の児童にとって存在感を実感できる場としてつくりあげる」ためには、児童が他者と関わり合い、自他の姿を振り返ることを大切にしたい学級づくりが必要であると考え。学級は、特性が異なる児童同士が関わり合って活動する場である。一人一人の考え方や感じ方に違いはあるが、学級という集団の中で、他者と関わり合って活動するからこそ、児童は、自他の良さや違いに気づき吸収し合うことができる。児童が他者と関わり合い、自他の姿を振り返ることを通して、一人一人が学級の一員として存在感を実感することができるようになるものと考え。このような考えから「学級づくり」を「他者と関わり合い、自他の姿を振り返ることを通して、児童一人一人が存在感を実感できる学級集団をつくること」と押さえる。

以上のように考え、本研究では「互いに認め合える学級づくり」を「他者と関わり合い、自他の姿を振り返ることを通して、自他の良さや変容、違いに気づき、大切な存在として思いを伝え合う学級集団をつくること」と捉える。このような学級づくりを目指し、目指す学校像の具現化を図りたいと考える。

5. 1. 2 「生活目標と関連付けた」について

本校の生活目標は、本校及び近隣小中学校が小中連携の一環として設定した生活指導の指針である「鳴瀬未来中学校区小学生の生活」に基づいて設定している。本校では、児童の実態に応じて、月ごとの生活目標を定め、生活指導に当たっている。児童は、必要感を持って生活目標を受け入れ、生活目標の具現化に向けて活動している。

生活目標の具現化に向けた取組は、児童の学校生活に深く関わっているため、日常的に実践するものであることが望まれる。互いに認め合える学級づくりに当たっては、この取組に、児童が他者と関わり合って、学級全体で取り組むことが不可欠であると考え。

そこで、本研究では、生活目標の具現化に向けた取組を、「他者と関わり合い、自他の姿を振り返る場」と位置付ける。学級全体で取り組む活動の中に、他者と関わり合う活動や自他の姿を振り返る活動を取り入れることを通して、自他の良さや変容、違いに学級全体で気付かせ、認め合わせていきたい。

なお、「鳴瀬未来中学校区小学生の生活」は、「時間」「命」「言葉」「物」「仲間」を5つの決まりとし、義務教育の9年間を通して指導を継続していくこととなっている。

5. 1. 3 「宮野森PFA活動」について

本校児童の、友達から褒めてもらっていると感じている割合が低いという実態から、互いに認め合える学級づくりに向けて、自他の良さや変容、違いに気付いたり認めたりする場を有効に機能させる必要があるという、課題解決の方向性を確認した。このことを受けて、本研究では、児童が他者と関わり合い、自他の姿を振り返る活動である「宮野森PFA活動」を実践する。宮野森PFA活動では生活目標の具現化を目指した活動を行う。

昨年度のPFA活動の成果を踏まえ、今年度は、他の学級との関わり合いも取り入れた宮野森PFA活動を実践する。児童が他者と関わり合って活動し、自他の姿を振り返り、良さや変容、違いを認め合えるようにしたいと考える。児童へは、宮野森PFA活動を、学級や学校のためのためを考えた活動（Project For All）として提示する。

宮野森PFA活動では、毎月生活目標の具現化に向けてどんな活動に取り組むかを学級で話し合い、児童が決めた活動を日々実践する。活動内容は生活目標や学級ごとの具体目標に応じて毎月設定するが、学級や学校のためのために自分たちができることを考えて活動していくという点は、毎月変わらない。活動の中に互いに関わり合う場を設定することを通して、他者を多面的に捉えたり、他者に貢献していこうとしたりする意欲を高めていく。帰りの会では、自他の姿を振り返る場を設けて認め合いと振り返りの日常化を図る。生活目標の具現化に向けて、他者と関わり合って活動し、自他の姿を振り返ったり互いの見取りを伝え合ったりすることを通して、自他の良さや変容、違いに気付

かせていきたい。

具体的な活動として、次のようなものが考えられる。

例えば、4月の生活目標「元気にあいさつをしよう」を受け、学級での話合いにより具体目標を設定した場合、「明るく笑顔であいさつをする」「毎朝10人にあいさつをする」などが考えられる。特に、入学間もない1年生へ積極的に挨拶をすることで、活動意欲や目的意識の喚起、他者貢献による充実感の醸成を図ることができる考える。活動に当たっては、他者と協力して取り組むことができるよう意図的に関わる機会を設定する。また、教師が児童の頑張りや変容を賞賛したり紹介したりすることで、児童は、自他の良さや変容、違いに目を向けていくことができるようになる考える。なお、帰りのナイスタイムでは、具体的な視点を示した振り返りカードを活用し、自他の取組の様子について振り返ったり伝え合ったりする。帰りの会のプログラムは図1のようなものを考えている。

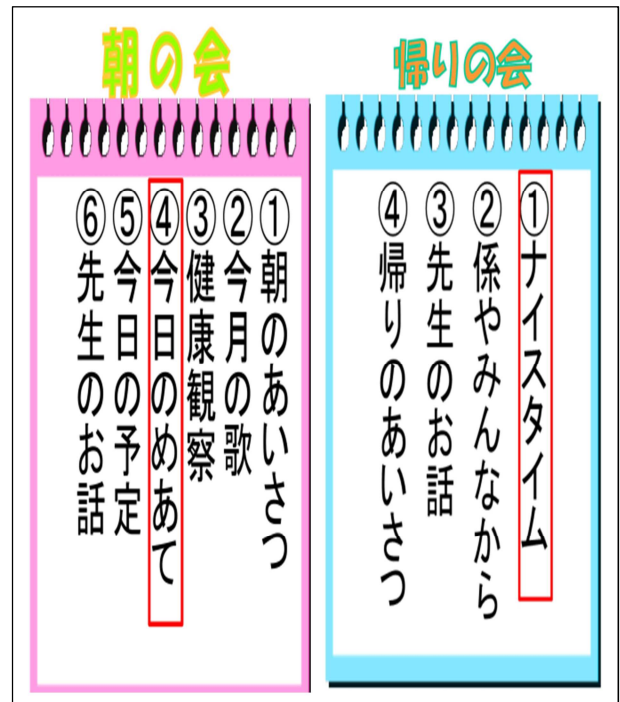


図1 朝の会と帰りの会のプログラム例

宮野森PFA活動では、自他の良さや変容、違いに目を向け、相手を分かろうとしたり思いを伝え合ったりすることを通して、互いの存在を感じ取らせることを目指す。児童が、日常的に自他の良さや変容、違いに気付いたり、周囲に認めてもらう安心感を味わったりすることで、認め合いの素地となる関わり方を身に付けていくものとする。このように、生活目標の具現化に向けて取り組み、他者と関わり合い、自他の姿を振り返ることを通して、互いに認め合える学級づくりを目指す。

5. 2 実態調査

5. 2. 1 調査のねらい

(1) 児童一人一人の実態と学級全体の実態、教職員の意識を以下の点から把握する。

- ① 「Q-Uアンケート」と「学級生活アンケート」からの児童の実態
- ② 教職員向け「学級生活アンケート」からの教職員の意識

(2) 調査結果を以下の取組に生かしていく。

- ① 学年の系統性を考慮した生活目標の設定
- ② 宮野森PFA活動の実践内容の検討
- ③ 児童の実態に合わせた一人一人の支援
- ④ 振り返りと伝え合いで使用する「振り返りカード」の作成
- ⑤ 児童の変容の見取りと考察

5. 2. 2 調査対象

東松島市立宮野森小学校 全児童 116名

5. 2. 3 調査期日

平成30年6月29日、平成30年11月12日

5. 2. 4 調査の方法及び内容

- (1) 調査回数 2回
- (2) 調査方法 質問紙法（選択肢式）

5. 2. 5 調査結果と考察

東松島市立宮野森小学校全児童116名と学級担任8名を対象に「学級生活アンケート」を実施し、児童同士の認め合いの実態と児童、教師の認識を把握したいと考えた。アンケート結果については、

第3学年18名分を抽出し、図2と図4に示す。

図2に示すとおり、「友達に励ましてもらっているか」「困っているとき友達に助けてもらっているか」のいずれの項目に対しても、児童の半数近くが、「あまりない」「ぜんぜんない」と回答している。また、「友達に褒めてもらっているか」という項目に対し33%の児童が「あまりない」「ぜんぜんない」と回答している。一方で、教師側は、いずれの項目も、全員が肯定的に捉えている。

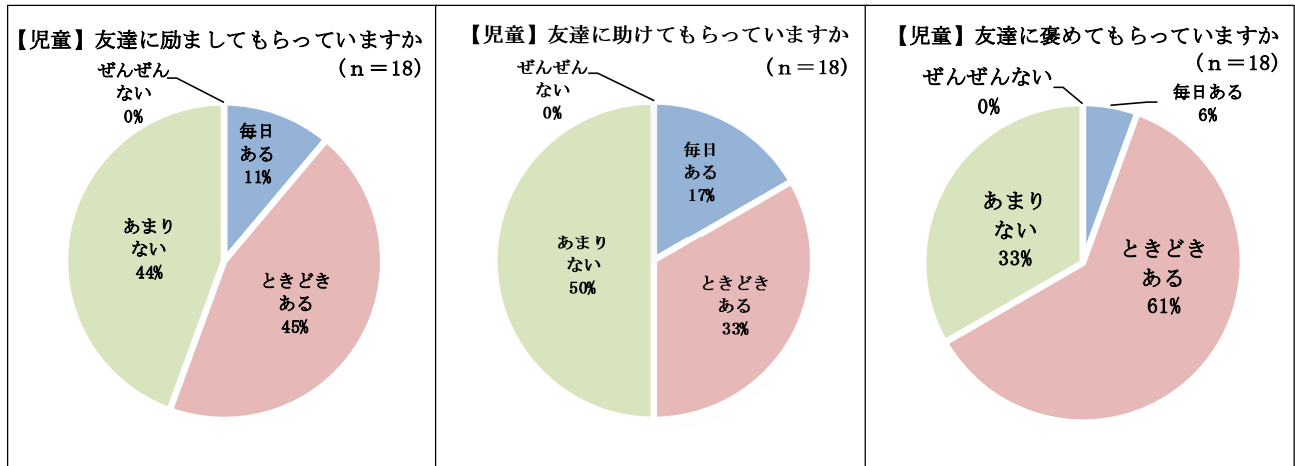


図2 学級生活アンケート結果1（褒める、励ます、助ける）

学級生活アンケートのそれぞれの項目に対して「毎日ある」「ときどきある」と肯定的に捉えている割合を、児童の実感と教師の捉えとして図3に示す。

児童、教師双方の回答から、学級で児童が相手を褒めたり励ましたりする姿は、見られることが分かる。しかし、それを実感できている児童の割合は、5割から7割にとどまっており、褒めたり励ましたりする対象が一部の児童に偏っていたり十分に相手に伝わっていないかったりして、一人一人が周囲から認めてもらっているという実感を持つことができていないことがうかがえる。

このことから、児童が他者と関わり合う活動を通して自他の良さや変容、違いに気づき、それを認め合う場を日常的に設定することが必要であると考えます。児童が、互いの活動の過程に目を向け、大切な存在として思いを伝え合う活動を通して、周囲から認めてもらっているという安心感を持たせていきたい。

一方で、図4に示すとおり、「ありがとうと言ってもらっている」「話を聞いてもらっている」の項目には、多くの児童が「毎日ある」「ときどきある」と回答している。「話を聞いているよ」「感謝しているよ」という気持ちを伝えることができる力を、日常生活の多くの場で生かしていくことで、一人一人の児童に、学級に所属する安心感を感じ取らせたい。それを土台として、互いに認め合える関係を構築していきたい。

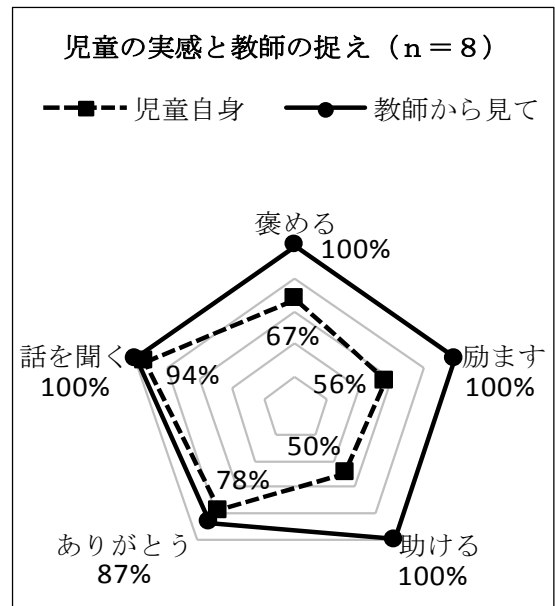


図3 児童の実感と教師の捉え

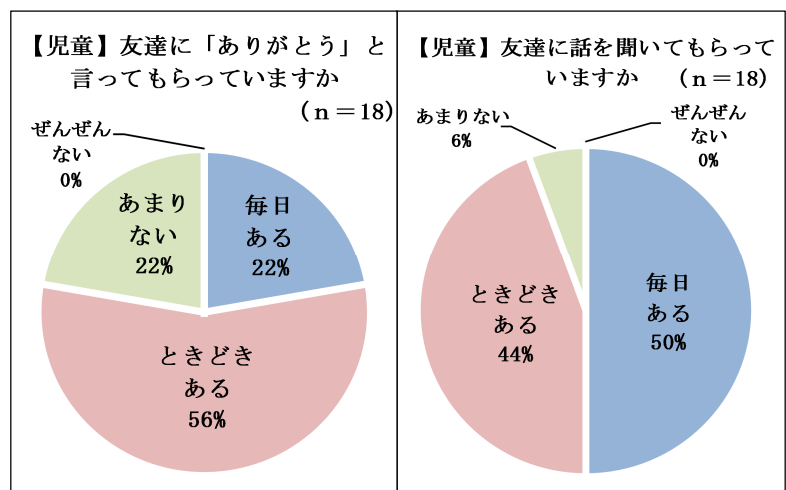


図4 学級生活アンケート結果2（「ありがとう」と言う、話を聞く）

５．３ 指導対策

５．３．１ 志教育の３つの視点を踏まえた生活目標の設定

本研究で取り組む宮野森PFA活動では、児童同士の関わり合いや活動の振り返りにおいて、自他の良さや変容に目を向けて認めるだけでなく、違いも受け入れようとするを大切にしており、そのような見方で自他の姿を振り返ることができる視点を示す必要があると考える。昨年度のPFA活動では、志教育の一環として、東松島市で取り組む「心あったかイートころ運動」と関連付けて、目指す学校像の具現化に取り組んだ。この活動では、児童自身が、志教育の３つの視点である「かかわる」「もとめる」「はたす」を基に、自分たちの活動を振り返ってきた。今年度の宮野森PFA活動においても、志教育の３つの視点を振り返りの視点として設定し、自他の姿を振り返らせていくことを通して、目指す学校像の具現化を図りたいと考える。

発達の段階や実態が異なるそれぞれの学級で、同じ目標に向かって活動を展開できるよう、生活目標の内容と志教育の３つの視点を関連付けた具体目標の設定が必要であると考えた。具体目標は、月初めに、学級で児童が話し合って決める。具体目標に、これまでの自分の姿や今の自分の姿を当てはめてみることで、児童が自分自身の成長を実感できるようにしたい。

表１に、第３学年の生活目標一覧表を示す。児童が話し合って決めた具体目標を、一覧表に記入する。活動の焦点化を図るため、具体目標は、第１・２学期は３つの視点の中から２点に絞り、その内１点を主項目として、重点的に取り組む。第３学期は、第１・２学期に取り組んだ活動も生かしながら、３つの視点全てに具体目標を設定する。

具体目標の設定に当たって、教師は、その月の主項目を児童に意識させるとともに、児童の実態に応じた具体目標になるよう助言を行う。また、表１に示す具体目標は、児童が具体目標を話し合う場で児童の考えを引き出す参考として活用する。教師から、具体目標の実現に向けた活動の過程を大切にするを、学級の約束事として周知し、一人一人が安心して活動に取り組むことができるようにする。

なお、第３学年の生活目標一覧表には、鳴瀬未来中学校区小学生の生活の５つの決まりである、時間、命、言葉、物、仲間との関連を示し、各学年で、具体目標と５つの決まりとを関連付けた生活指導を実践することができるようにする。

表１ 第３学年の生活目標一覧表

学期	月	生活目標	５つの決まりとの関連	具体目標（◎主項目）		
				かかわる 全：褒める、励ます	もとめる 全：自分で、進んで	はたす 全：最後まで、一生懸命
第１学期	４月	元気に挨拶をしよう	時間・命 言葉・物・仲間	◎明るい笑顔で挨拶をしよう！	毎朝、１０人に挨拶をしよう！	
	５月	廊下は静かに歩こう	時間・命 言葉・物・仲間	◎みんなで優しく声を掛け合おう！		１・２年生にも声を掛けよう！
	６月	時計を見て行動しよう	時間・命 言葉・物・仲間		◎２分前行動をしよう！	１・２年生に声を掛けて一緒に教室に戻ろう！
	７月	学習用具を整理整頓しよう	時間・命 言葉・物・仲間	グループの友達と点検しよう！	◎毎朝、机の中の本をそろえよう！	
第２学期	８月	学習用具を整理整頓しよう	時間・命 言葉・物・仲間	◎グループの友達とアドバイスし合おう！	毎朝、机とロッカーの荷物を整理しよう！	
	９月	大きな声で返事をしよう	時間・命 言葉・物・仲間	相手の顔を見て返事をしよう！	◎授業中、自分から「はい」と「いいえ」の返事をしよう！	
	１０月	外で元気に体を動かそう	時間・命 言葉・物・仲間		自分の目標に挑戦しよう！	◎毎日１回は体を動かそう！（体育、遊び、持久走）
	１１月	忘れ物をゼロにしよう	時間・命 言葉・物・仲間	◎グループの友達と作戦を考えよう！		家でも、チェックシートで持ち物を点検しよう！
	１２月	廊下・階段は右側を歩こう	時間・命 言葉・物・仲間		◎気を付けて歩く所を探して、友達に教えよう！	３年教室前で、右側歩行を呼び掛けよう！
第３学期	１月	いつでも自分から挨拶をしよう	時間・命 言葉・物・仲間	◎相手の表情を見て明るく挨拶をしよう！	朝と帰りに、自分から１０人に挨拶をしよう！	１・２・４年生が笑顔になるように明るく挨拶をしよう！
	２月	室内での過ごし方を工夫しよう	時間・命 言葉・物・仲間	友達と、楽しく遊ぼう！	◎室内にふさわしい遊びを考えて、楽しく遊ぼう！	◎１・２・４年生に楽しい遊びを教えよう！
	３月	たくさんの「ありがとう」をこめて学校をびかびかにしよう	時間・命 言葉・物・仲間	◎友達と仲良く協力して掃除をしよう！	◎びかびかにする所を探して掃除をしよう！	自分の分担を最後までやりぬこう！

5. 3. 2 生活目標に係る日常的な実践（意図的・計画的な振り返りの場の設定）

昨年度までの本校の実践における課題として、認め合いの場が十分に機能していなかったことが挙げられる。そのことから、本研究では、児童が日常的に生活目標の具現化に向けた取組について振り返り、認め合いの活動に取り組む場を設定する。

宮野森PFA活動は、図5に示すように計画、実践、振り返り、改善のステップで構成する。

(1) 計画のステップについて

計画のステップは、今月の生活目標に向けて、具体目標や活動の内容を話し合う場である。話し合いは、月初めに、業前活動で実施する。学級や学校のためのためを考えた活動（Project For All）という活動のねらいを踏まえた内容を児童に考えさせることで、活動意欲と目的意識を持たせる。また、実態に即した役割を分担させることを通して、児童一人一人が責任感を持って活動に取り組むことができるようにする。

(2) 実践のステップについて

実践のステップは、計画のステップで決まった活動に、毎日各自が取り組む場である。学級や学校のためのために活動するという活動のねらいを自覚し、他者と関わり合って活動できるようにする。生活目標や具体目標の内容により、月ごとに活動の中心となる場面は異なることが考えられる。そこで、生活目標や具体目標の内容に応じて、特にどの場面で意識的に行動することができるか、朝の会で児童に考えさせる。具体目標の実現に向けて児童が関わり合う場面では、志教育の3つの視点を踏まえた賞賛や助言を与えたり、児童の感想を引き出したりして、自他の良さや変容、違いに気付かせていく。

(3) 振り返りのステップについて

振り返りのステップは、自他の姿を振り返り、伝え合う場である。火曜日と金曜日の帰りの会に位置付ける。火曜日には、教師から、前週の児童の姿を賞賛したり今月の主項目を確認したりすることを通して、児童に1週間の活動意欲を持たせる。金曜日には1週間の活動の様子を踏まえた振り返りを行わせ、翌週の活動への意欲付けを図る。週2回の振り返りにより、児童に、1週間の活動に見通しを持たせると共に、翌週の活動への意欲を喚起したい。火曜日と金曜日の帰りの会で、振り返りカードを活用し、志教育の3つの視点に沿って、自他の取組の様子を振り返らせる。振り返りの場では、振り返りカードによる振り返りと、伝え合いの活動に取り組ませる。振り返りカードの表面を、図6に示す。振り返りカードに、志教育の3つの視点や具体像を示すことを通して、児童が自他の具体的な姿を振り返ることができるようにする。3年生の児童が、短時間で日常的に振り返りに取り組むことを考慮して、記号や友達の名前のみを記入する形式とし、活動の負担感を軽減する。また、具体像として行動面だけでなく意欲面に関する項目も設けて、振り返らせることを通して、うまく



図5 宮野森PFA活動 1か月の流れ

生活目標 ふり返しカード（4月） 名前 _____

今月の生活目標
元気にあいさつをしよう

3年生の目標
明るい笑顔であいさつするぞ！
毎朝、10人に、自分からあいさつをするぞ！

振り返り（◎よかった、○まあまあ、△もう少し）

項目	No.	目 標	1週目		2週目		3週目		4週目		振り返りカードに記入した友達の名前をここに書く
			火	金	火	金	火	金	火	金	
か	①	明るい笑顔で！									
か	②	ほめる！「すごいね」「たすかった」									
わ	③	励ます！「いいね」「がんばったね」									
も	④	毎朝10人にあいさつ！									
と	⑤	自分で！									
め	⑥	進んで！									

「がんばった」、「よくやった」、「あきらめなかった」ことを、たくさん見つけよう！

図6 振り返りカード（表面）

行動できない児童にも、自他の活動の過程や努力に目を向けさせることができるようにする。さらに、振り返りカードの裏面には、図7に示すように児童が自他の姿を振り返って感じたことを書くことのできる自由記述欄を設け、関わり合いを通して感じた喜びや楽しさなどの心情を記述させる。伝え合いの場では、振り返りカードを基にペアやグループ、学級全体で、互いの見取りを伝え合わせる。自他の姿だけでなく自由記述欄に記入した児童一人一人の感情も伝え合わせることを通して、児童が互いに自他の良さや

生活目標 ふり回りカード（4月）

今月の「あのね！」

視点	目 標	自分のことや友達のことを感じたことを書こう！ がんばれた、よくやった、あきらめなかった、うれしかった
か か わ る	① 明るいうちで！	
	② ほめる！「すごいね」「がんばったね」	
	③ 励ます！「いいね」「がんばって」	
も と め る	④ 毎朝10人にあいさつ！	
	⑤ 自分で！	
	⑥ 進んで！	

「がんばれた」、「よくやった」、「あきらめなかった」ことを、たくさん見つけよう！

図7 振り返りカード（裏面）

変容、違いに目を向け合っていることや、存在を認め合っていることを感じ取らせる。教師は、自他の活動の過程や努力を伝えることができた児童や関わり合いを通じた喜びや楽しさを伝えることができた児童を学級全体へ紹介したり、周囲と違った考え方や感じ方をした児童の様子について学級全体で考えさせたりすることを通して、児童が他者を認める視点を広げていく。

(4) 改善のステップについて

改善のステップは、児童が、具体目標の実現に向けた活動を、半月単位で振り返り、その後の改善点を話し合う場である。毎月第2水曜日と月末の業前に、自分たちの姿を振り返らせ、月後半や翌月の取組でどんな工夫をしていくか話し合わせる。各自の振り返りを、チェックシートにシールで表し、廊下に掲示することで、学級での宮野森PFA活動の取組が、他の学級にも見えるようにする。

なお、自由記述欄に児童が記述した内容は、児童の内的変化の記録として累積し翌月以降の具体目標の設定に生かしていく。

5. 4 活動実践と考察

5. 4. 1 志教育の3つの視点を踏まえた生活目標の設定

本研究では、自他の良さや変容、違いに気付かせる視点として、志教育の3つの視点を活用した。生活目標と志教育の3つの視点を関連付けて、3つの視点それぞれを踏まえた具体目標を設定した。実践を通して改善を加えた第3学年の生活目標一覧表を表2に示す。

表2 実践を通して改善を加えた第3学年の生活目標一覧表

月	生活目標	5つの決まりとの関連	具体目標（◎主項目）		
			かかわる 全：褒める、励ます	もとめる 全：自分で、進んで	はたす 全：最後まで、一生懸命
9月	大きな声で返事をしよう	時間・命 言葉・物・仲間	相手に伝わる返事をしよう！ （表情、目線、うなずき）	◎授業中、自分から「はい」と「いいえ」の返事をしよう！ （名前、号令、呼び掛けに）	
10月	外で元気に体を動かそう	時間・命 言葉・物・仲間		・体調に合わせて、運動の仕方を考えよう！ ・自分のペースを考えて走ろう！	◎校庭を○周以上走ろう！
11月	忘れ物をゼロにしよう	時間・命 言葉・物・仲間	◎連絡ノートを確認しよう！		家での準備を工夫しよう！ （各自の具体目標も設定）

具体目標は、志教育の3つの視点である「かかわる」「もとめる」「はたす」を踏まえた内容を設定させた。実践開始当初、児童は、それぞれの視点にどのような目標を設定すればよいのか、なかなか捉えられなかったため、「人とかかわる」「より良い活動をもとめる」「自分にできることをはたす」と言葉を補って説明し、さらに、日々の生活で見られる自分たちの姿がどの視点を踏まえた行動なのかを話し合わせた。このような説明や話し合いを通して、児童はそれぞれの視点を踏まえた具体的

な姿を捉えることができるようになった。具体目標の設定に当たっては、表1に示した第3学年の生活目標一覧表も活用した。また、第3学年の生活目標一覧表に示された具体目標を例に、児童の実態に当てはめたり、児童の考えを取り入れたりすることを通して、児童の実態に応じた具体目標を設定することができた。

具体目標は、活動の焦点化を図るため、第1・2学期は3つの視点の中から2点に絞って設定し、そのうち1点を主項目として重点的に取り組むようにした。具体的には、10月の主項目として、「はたす」と関連した「校庭を○周以上走ろう」を設定した。具体目標の設定に当たっては、具体目標の実現だけに目を向けるのではなく、実現に向けた活動の過程を大切にすることを教師から伝えるようにした。教師からの働き掛けを受けて、児童からは、主項目の実現を目指す中でも、自分の体調に合わせてペースを考えて走ったり、友達の体調を知り無理をしないよう声を掛けたりすることも大切にしようという考えが出された。そこで「もとめる」と関連した具体目標として、「体調に合わせて運動の仕方を考えよう」「自分のペースを考えて走ろう」を設定することとした。この具体目標を設定したことにより、体調を崩している児童や走ることを苦手とする児童にも、安心して活動に取り組む姿が見られるようになった。このような姿を教師が学級全体に紹介することにより、児童はその人なりの頑張り方があることに気付くことができた。このことで、児童は、主項目の実現に向けて努力するだけでなく、自他の体調を考慮して励まし合ったり、努力している姿勢を褒め合ったりすることができるようになった。

以上の実践と児童の変容から、志教育の3つの視点を踏まえた生活目標を設定することを通して、児童に自他の姿を振り返る明確な視点を持たせ、自他の良さや変容、違いに気付かせる基盤をつくることができたと考える。

5. 4. 2 生活目標に係る日常的な実践（意図的・計画的な振り返りの場の設定）

児童が日常的に生活目標の具現化に向けた取組について振り返り、認め合う活動を、計画、実践、振り返り、改善の4つのステップで展開した。

(1) 計画のステップについて

計画のステップでは、今月の生活目標の具現化に向けて、具体目標や活動内容についての話し合い活動を展開した。具体目標の設定に当たっては、学級や学校のみんなのためになるような内容を児童に考えさせた。

9月の生活目標「大きな声で返事をしよう」に関する具体目標の話し合いでは、「大きな声」という面にのみ着目した意見が多く出された。そこで、声が大きいことで、逆に相手に不快感を与えたり自分が不快に感じたりした経験を振り返らせた。互いの経験を述べ合うことを通して、児童は自他の考え方や感じ方の違いに気付き、相手の気持ちや伝えたい話の内容を自分が受け取ったということを伝えるのに適した返事の仕方があるという意識を持つことができた。

また、学級全体として大きな声で返事ができるようにするために、一人一人にできることは何かを考えさせたところ、各自が自分から返事をすることが大切であるという意見が出され、「もとめる」の具体目標として『授業中、自分から「はい」と「いいえ」の返事をしよう』を設定することとなった。このような話し合いを通して、学級のみんなのために各自にできることを進んで行っていくという認識を、学級全体で共有することができた。

このように、計画のステップにおいて、学級や学校のみんなのためになる内容を他者の気持ちに寄り添いながら話し合うことを通して、児童は活動の目的意識と学級や学校の一員としての自覚や責任感を持つことができるようになったと考える。

(2) 実践のステップについて

実践のステップでは、児童が、具体目標の実現に向けて、各自活動を展開した。

計画のステップで設定した具体目標を、朝の会で確認することにより、児童は学級や学校のみんなのために活動するという活動のねらいを捉えることができた。実践のステップで、児童が相手のことを考えて活動するためには、他者の考え方や感じ方を知る必要がある。そこで、朝の会で、そ

の日の活動で「こんなことに気を付けたい」や「こんなことができるようにしたい」という各自の考え方や感じ方を、互いに伝え合う時間を設けた。また、朝の会で毎回違う相手と伝え合わせ、多くの友達の考え方や感じ方に触れることができるようにした。児童は、具体目標の実現に向けて活動する場面でも、その日の朝の会で伝え合った相手を中心に関わ合うようになったことから、朝の会で互いに考え方や感じ方を伝え合うことが、自他の関わり合いを促したものと考えられる。

実際の活動では、次のような実践を展開した。10月の具体目標「自分のペースを考えて走ろう」の実現に向けた実践では、児童は、目標とする周回数を走的过程中で、互いに走った周回数を数え合ったりペースについてアドバイスし合ったりした。初旬には、多くの児童が、自分のペースで走りながら他者の様子に目を向けることに難しさを訴えていた。そのため、朝の会で、その日に頑張りたいことやできるようになりたいことを伝え合わせると共に、「君が頑張ろうとしているのはこういうことだね」「こういうことをできるようになりたいんだね」などと確認し合うようにさせた。その上で活動に取り組みさせたところ、児童は、相手の様子に目を向け、「いいね」「頑張れ」「こうするといいよ」などの言葉を掛け合いながら活動するようになった。児童からは、自分が頑張っている点を認めてもらえたことをうれしく思ったり、励ましてもらったことを心強く感じたりしたという感想が出された。教師は、朝の会での伝え合いや活動の場での観察を通して、児童の考え方や感じ方を把握し、志教育の3つの視点を踏まえた励ましの言葉を掛けたり、児童の変容を適切に捉えたりすることができた。また、11月の具体目標「連絡ノートを確認し合おう」の実現に向けた実践では、連絡ノートに記入したメモを確認し合う活動に取り組みさせた。児童は、メモに記入漏れがないか確認し合ったり、メモの文字の色や大きさについての工夫を紹介して助言し合ったりすることを通して、互いの考えの良さを見出すことができるようになった。また、児童には、助言を生かして忘れ物を減らすことができた友達を称賛したり、友達の頑張りをともに喜び合ったりする姿が見られるようになった。全員が忘れ物をせず、学級全体で忘れ物がゼロになった日には、教師から一人一人の工夫や努力、互いの協力が、目標の実現につながったことを話した。このような取組と教師からの働き掛けにより、児童に、自分の力が学級や友達のために役立っているという自覚を持たせることができた。

以上のように、実践のステップで展開した活動を通して児童一人一人が味わった、他者に自分の考え方や感じ方を気付いてもらえるうれしさや自分に目を向けてもらえる心地良さ、他者の役に立っているという自覚が、児童の承認欲求の充足や自己有用感の高まりにつながったものと考えられる。

(3) 振り返りのステップについて

振り返りのステップでは、志教育の3つの視点を踏まえて、帰りの会で、自他の一日の活動を振り返り、互いの見取りを伝え合う活動を展開した。

振り返りと伝え合いで活用する振り返りカードは、3年生児童の実態を考慮し、児童自身が記号や友達の名前のみを記入する形式とした。児童は、2分程度という短時間で自他の様子を振り返ることができた。志教育の3つの視点を踏まえながら、日常的に自他の考え方や感じ方、その変容を確認するための有効な手立てであったと考える。

振り返りカードに示された視点を踏まえて、実践のステップでの自他の様子を、行動面だけでなく「最後まで」「進んで」といった意欲面からも振り返らせることにより、児童からは「できるようになった」や「最後まで頑張ることができた」という発言が多く聞かれるようになった。一方で、具体目標に設定した数値や、「できた」「できない」という結果に固執する児童も見られたため、教師から、活動の過程で見付けた工夫や努力、以前からの変容などについて、積極的に学級全体に紹介した。例えば、10月には、体調の悪かった児童が、その後に一層頑張ろうと努力する姿を教師が学級全体に紹介し、目標の周回数に達していないことがその児童の「頑張ろう」とする気持ちを高めていることを知らせた。また、11月には、忘れ物をした原因をよく考え繰り返さないよう手立てを考えているペアを紹介し、学級全体でそのペアに適した手立てを考える場を設けた。児童は、学級全員で考えたことにより、自分たちもペアのために頑張ることができたことに気付き、具

体目標の実現に向けて努力することを体験することができた。このような振り返りの取組と教師からの働き掛けを通して、児童は、活動の過程にも他者の良さや変容を見出し、認めることができるようになったと考える。

ペアやグループ、学級全体で、活動を通して得た互いの感情についても伝え合いを行なった。同じ活動に取り組んでいても、それぞれが違った感情を持つことに気付き、「良かったね」と共に喜んだり「頑張ったね」と励ましたりしていた。感情の伝え合いによって、児童が、互いの考え方や感じ方の違いに気付き、他者を認める視点を広げることができたと考える。

(4) 改善のステップについて

改善のステップでは、具体目標の実現に向けた活動を半月単位で振り返り、その後の改善点を話し合う活動を展開した。

9月前半を終え、改善点を話し合う活動では、具体目標に設定した「相手に伝わる返事」が具体的にどのような返事なのかよく分からない、という意見が出された。そこで、学級全員で相手に伝わる返事的具体例を考え、類型化した。表情、目線、うなずきの3つの要素を使って自分の気持ちを相手に伝えることが、自分たちの考える「相手に伝わる返事」であるという考えにまとまった。この話し合いを受けて、9月後半は、表情、目線、うなずきという具体的な行動に着目して実践や振り返りに取り組むこととした。児童は、自分たちの話し合いを通して活動がより良いものになることを実感し、進んで実践や振り返りに取り組むようになった。半月単位で具体目標の見直しを図ることにより、児童が1か月を通して意欲的に活動を継続することができたものとする。

各自の振り返りは、図8に示したように、チェックシートにシールを添付して廊下に掲示した。他の学級の児童がチェックシートを見て感想を述べ合う姿が見られるようになったことから、チェックシートが学級での活動の取組を他の学級へ紹介する一助となったことがうかがえる。チェックシートと合わせて活動の具体的な内容を表示したり学校放送で紹介したりするなど、学級での取組が他の学級へ波及していく手立てを、さらに工夫していきたい。

図8 チェックシート

6 研究のまとめ

6. 1 研究の成果

児童一人一人の実態と学級全体の実態、教職員の意識の変容を把握するため、2回目の「学級生活アンケート」「Q-Uアンケート」を実施した。1回目と2回目の結果を、表3と表4に示す。

表3 学級生活アンケートの調査結果の比較

質問項目	「毎日ある」、「時々ある」の回答(%)		増減(%)
	6月(n=18)	11月(n=17)	
あなたは 友達に ほめてもらっていますか	67	83	+16
あなたは 友達に はげましてもらっていますか	55	71	+16
あなたは 友達に「ありがとう」と言ってもらっていますか	78	76	-2
あなたは 友達に「ごめんね」と言ってもらっていますか	55	71	+16
あなたは 友達に 話を聞いてもらっていますか	96	100	+4
あなたは 困っているとき 友達に 助けてもらっていますか	50	83	+33

表4 Q-Uアンケートの調査結果の比較

	6月(n=18)	11月(n=17)	増減(%)
承認されていると感じる度合いの高い割合(承認得点18点以上)	61	76	+15
承認されていると感じる度合いの低い割合(承認得点17点以下)	39	24	-15

学級生活アンケートの全ての質問項目で、「毎日ある」「時々ある」と回答した児童が前回よりも増加している。特に、「助ける」の項目で、肯定的な回答が増加している。このことは、日常的に自他の姿を振り返り、伝え合う活動を通して、自他の活動の過程に目を向け、他者の困りごとに気付いて手を差し伸べることができるようになってきた様子からもうかがえる。また「褒める」「励ます」の項目にも変容が見られた。志教育の3つの視点を踏まえて、自他の姿を振り返ったり伝え合ったりする取組を、日常的に実践することを通して、互いに良さや変容、違いに目を向け合い、存在を認め合うことができるようになってきていることが、この結果に結びついていると考える。そのことが、Q-Uアンケートの、承認されていると感じる度合いの変容にも表れているものと捉えられる。

また、教師と児童の捉えの比較を表5に示す。前回の結果と比較すると、教師と児童の捉えの差が減少していることが分かる。これは、前述の通り、児童の捉えに大きな変容が見られたことに起因していると考えられる。教師の捉えは、前回同様、全員が肯定的に捉えており差異はないが、教師同士の意見交換において、志教育の3つの視点を踏まえた振り返りと認め合いの実践を通して、教師自身が意識的に3つの視点を踏まえて児童の姿を観察するようになったという意見が出された。視点を踏まえた日常的な振り返りと認め合いの場を有効に機能させていくことが、教師自身の意識の変容にもつながったと考えられる。

表5 教師の捉えと児童の捉えの比較

	褒める(%)		励ます(%)		助ける(%)		ありがとう(%)		話を聞く(%)	
	6月	11月	6月	11月	6月	11月	6月	11月	6月	11月
児童の実感(児童が自分たちの様子を見た実感) (6月:n=18, 11月:n=17)	57	82	56	71	50	82	78	82	94	100
教師の捉え(教師から見た児童の姿) (n=8)	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

6. 2 今後の課題

本研究は、約2か月間の実践であったため、振り返りカードの自由記述欄の活用までには至らなかった。友達の名前だけでなく、自他の関わりの中でうれしかったことや頑張れたことなどを端的に記述させることを通して、志教育の3つの視点を踏まえた伝え合いに生かしていきたい。

10月の生活目標に関しては、学級内で役割を分担する内容ではなかったため、活動に対する責任感を持たせるには至らなかった。月ごとの生活目標に応じた役割を工夫させていくことを通して、学級全体で活動に取り組む体制を整えていく必要がある。

また、これまでの実践は、朝の会や帰りの会、休み時間の実践に限定されていた。生活目標と、特別活動や学級活動との関連を明確にした指導計画を作成することを通して、児童が多くの場合で自他の良さや変容、違いを認め合える機会を設定できるようにしたい。併せて、他の学級における実践を想定し、各学年でどのように振り返りと認め合いに取り組ませていくことが効果的なのかについても探りたい。

主な参考文献

- | | | |
|-----|----------------------------------|-----------|
| [1] | 宮城県教育委員会：第2期宮城県教育振興基本計画 | 2017 |
| [2] | 東松島市教育基本方針重点目標 | 2018 |
| [3] | 文部科学省：「生徒指導提要」 | 2010 |
| [4] | 文部科学省：「小学校学習指導要領 解説総則編」(平成29年告示) | 2018 |
| [5] | 宮城県教育委員会：夢をはぐくみ志を高めるみやぎの志教育プラン | 2010 |
| [6] | 滝充編著：ピア・サポートではじめる学校づくり小学校編 | 金子書房 2009 |
| [7] | 松下崇著：自治的集団づくり入門 | 明治図書 2017 |
| [8] | 赤坂真二著：学級をチームにする極意 | 明治図書 2013 |